

LIVING WATER

神の霊は水の上を動いていた

(By Living Water Maru 810)

要旨

LIVING WATER は、人間を「源」から存在を受け取り、世界のために生命の流れとなるよう招かれている存在として考察する、実存的・存在論的な黙想である。

この考察は、創造物語における水の神秘から始まる。創世記1章2節では、神の霊が水の面を動いている。そしてエデンへ進み、一本の川がピション、ギホン、ヒデケル（ティグリス）、ユーフラテスという四つの川に分かれる。

四つの川は、人間存在の四つの基本的な動きとして黙想される。存在を受け取ること、関係の中に生きること、目的へ向かって歩むこと、限界を受け入れて自分を委ねることである。

キルケゴールは、神の前で自己自身となっていく歩みを示す。ガブリエル・マルセルは、存在を問題ではなく神秘、参与、現前、関係として考えることを助ける。カール・ラーナーは、人間を神の神秘へ開かれた有限な精神として理解し、恵みを神の自己伝達として考える。

本稿のゲマトリアは、聖書が明示的に教える数秘術ではなく、ヘブライ語の川の名前を黙想的に見るためのものである。Mispar Gadol によれば、ピション1,096、ギホン727、ヒデケル142、ユーフラテス680、合計2,645である。

水の旅は、キリストにおいて「生ける水」としてその充満を見いだす。渇く者は来て飲み、生命を受け、世界のための生命の流れとなるよう招かれている。

I. 神の霊は水の上を動いていた

「神の霊が水の面を動いていた。」 — 創世記1:2

すべてが光となる前、世界が形と名を持つ前に、水がある。まだ形を持たない深みの上を、神の霊が動いている。

水は生命のイメージである。水は受け、流れ、養い、清め、新しいものが生まれる場所をつくる。

人間も同じである。名前、職業、地位、成功、失敗を持つ以前に、私たちはすでに存在している。存在を理解する前に、存在を受け取っている。

私はなぜ存在するのか。

私の存在はどこから来るのか。

私の存在はどこへ流れるのか。

私の存在は誰へ帰るのか。

キルケゴールは、この問いを個人の生命の中心へ置く。人間は神の前で自己自身にならなければならない。

II. エデンの川 — 一つの源、四つの流れ

「一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから四つの川となった。」 — 創世記2:10

エデンから一本の川が流れ出て、ピション、ギホン、ヒデケル、ユーフラテスという四つの流れになる。

一つの源。

四つの動き。

一つの生命。

人間経験の四つの次元。

私はどのように存在を受け取るのか。

私はどのように他者と生きるのか。

私はどこへ向かっているのか。

私はどのように限界を受け入れ、自分を委ねるのか。

マルセルは、人間の存在は単なる対象ではなく、私たち自身が参与する「神秘」であることを思い起こさせる。

III. ピション — פִּישׁוֹן

存在は恵み

「第一の名はピション。それはハビラの全地を巡る。」 — 創世記2:11

Mispar Gadol:

פ 80 + פ 10 + פ 300 + פ 6 + פ 700 = 1,096

PISON = 1,096

人間は自分自身の存在を創造しない。私は生まれることを自分で選ばなかった。私は受け取る。

私は存在する。しかし私自身が自分の存在の源ではない。

キルケゴールは、存在を受け取ることが自由を失うことではないと示す。自己は、与えられた現実をどのように受け取り、生きるかによって自己自身になっていく。

ラーナーは、恵みによって人間が神へ開かれていることを深める。

PISON — 私は、自分が存在することを受け取る。

IV. ギホン — גִּיחוֹן

存在は関係

「第二の川の名はギホン。それはクシュの全地を巡る。」 — 創世記2:13

Mispar Gadol:

ג 3 + ג 10 + ג 8 + ג 6 + ג 700 = 727

GIHON = 727

人間は一人だけで人間になるのではない。

私は他者から生命を受け取る。

他者から言葉を学ぶ。

他者の顔を通して顔を知る。

愛されることによって愛を知る。

「私は誰か」という問いは、「私は誰と共に自己自身になるのか」という問いと結びついている。

マルセルは、他者を単なる対象ではなく、出会うべき人格として考えることを助ける。

GIHON — 私は他者と共に存在する。

V. ティグリス／ヒデケル — תִּיגְרִיס / הִדְּקֶל

方向を持つ存在

「第三の川の名はティグリス。それはアッシリアの東を流れる。」 — 創世記2:14

Mispar Gadol:

$$\aleph 8 + \daleth 4 + \rho 100 + \beth 30 = 142$$

HIDDEKEL = 142

人間はただ存在する者ではない。人間は歩む者である。

私たちは時間の中に生き、昨日から明日へ向かう。速く動いていても方向を失うことがある。人生には方向が必要である。

キルケゴールは選択と決断を存在の中心に置く。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」 — ヨハネ14:6

キリストご自身が道である。

HIDDEKEL — 私は目的へ向かって歩む。

VI. ユーフラテス — פ, ג, נ

限界の中にある存在

「第四の川はユーフラテスである。」 — 創世記2:14

Mispar Gadol:

$$\phi 80 + \gamma 200 + \eta 400 = 680$$

EUPHRATES = 680

私たちは生まれ、成長し、愛し、失い、傷つき、死ぬ。しかし限界は必ずしも不条理を意味しない。生命が限られているからこそ、生命は尊い。

恵みとして受け取ったものを、最後には委ねなければならない。

ラーナーは、人間を神の神秘へ開かれた有限な精神として理解する。

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」 — ヨハネ11:25

EUPHRATES — 私は限界を受け入れ、委ねることを学ぶ。

VII. 四つの川として現れる存在の四つの動き

PISON — 受け取る

存在を恵みとして受け取る。

GIHON — 関係する

他者と共に存在する。

HIDDEKEL — 歩む

方向と目的へ進む。

EUPHRATES — 委ねる

限界を受け入れ、源へ人生を委ねる。

受け取る → 関係する → 歩む → 委ねる

キルケゴールは自己自身になる旅を示す。

マルセルは現前と関係を示す。

ラーナーは神の神秘への開かれを示す。

受け取った水は、よどむためにあるのではない。水は流れなければならない。

VIII. エデンからキリストへ

水はエデンで止まらない。創造、大洪水、紅海、荒れ野の岩、ヨルダン川、洗礼、そしてキリストが約束する生ける水へと続く。

「**渴いている人は、わたしのところへ来て飲みなさい。**」 — ヨハネ7:37

人間は意味、愛、真理、赦し、生命を渴望する。しかし最も深い渴きは有限なものだけでは満たされない。

ラーナーは、人間を無限の神秘へ開かれた存在として理解する。そしてキリストにおいて、この探求は中心を見いだす。

キリストは生ける水である。

追加 — ダビデの詩編：神を渴望する魂

「**鹿が水の流れを慕いあえぐように、神よ、わたしの魂はあなたを慕いあえぐ。わたしの魂は、生ける神に渴いている。**」 — 詩編42:2-3

鹿は水を求める。渴いているからである。人間の魂も同じである。

最も深い渴きは、何かを所有したいという願いだけではない。それは生命の源を見いだしたいという憧れである。

ピション、ギホン、ヒデケル、ユーフラテスは、ここで内面的な意味を持つ。

キルケゴールは、この渴きを神の前で自己自身となる実存的な憧れとして読む助けとなる。マルセルは、深い憧れを単なる問題ではなく神秘として理解させる。ラーナーは、人間の渴きを神への開かれの中に置く。

詩編42は、祈り、告白、渴き、源へ帰る動きである。

「**渴いている人は、わたしのところへ来て飲みなさい。**」 — ヨハネ7:37

鹿は川を求める。

魂は神を求める。

人間は源を求める。

キリストは生ける水として来られる。

LIVING WATER — 渴く魂は源へ帰る。

IX. 内から流れ出る水

「**わたしを信じる者のうちから、生きた水が川となって流れ出る。**」 — ヨハネ7:38

私たちは源へ来る。飲む。しかしそこで止まらない。

祈りは愛となる。

愛は行動となる。

行動は奉仕となる。

奉仕は他者のための生命となる。

観想は世界から逃げることではない。源へ戻り、新しい心で世界へ戻ることである。

X. 世界のための川となる

LIVING WATER は飲むためだけの招きではない。川となるための招きでもある。

愛を受け取るのは、愛するため。

赦しを受け取るのは、赦すため。

生命を受け取るのは、生命を与えるため。

人間は水たまりになるためではなく、川になるために呼ばれている。

XI. 源へ帰る

聖書の初めに水がある。エデンに川がある。川は四つの流れになる。キリストに生ける水がある。そして聖書の終わりに生命の川がある。

「神と小羊の玉座から流れ出る、澄んだ水晶のような生命の水の川を、わたしは見た。」 — 黙示録22:1

水 → エデン → 四つの川 → キリスト → 生ける水 → 生命の川

私たちは源から来る。

人生を流れる。

限界に出会う。

委ねることを学ぶ。

そして源へ帰る。

キルケゴール：神の前で自己自身になること。

マルセル：現前と関係を通して存在の神秘へ入ること。

ラーナー：神の神秘へ開かれていること。

しかし、すべてはキリストへ向かう。

XII. 主要な聖書引用

創世記1:2 — 「神の霊が水の面を動いていた。」

創世記2:10 — 「一つの川がエデンから流れ出て園を潤した。」

詩編42:2-3 — 「鹿が水の流れを慕いあえぐように、わたしの魂はあなたを慕いあえぐ。」

ヨハネ7:37 — 「渇いている人は、わたしのところへ来て飲みなさい。」

ヨハネ7:38 — 「生きた水が川となって流れ出る。」

ヨハネ14:6 — 「わたしは道であり、真理であり、命である。」

ヨハネ11:25 — 「わたしは復活であり、命である。」

黙示録22:1 — 「生命の水の川。」

XIII. エデンの四つの川のゲマトリア

ピション — פִּישׁוֹן — 80 + 10 + 300 + 6 + 700 = 1,096

ギホン — גִּיחוֹן — 3 + 10 + 8 + 6 + 700 = 727

ティグリス／ヒデケル — תִּיגְרִיס / הִדְּקֵל — 8 + 4 + 100 + 30 = 142

ユーフラテス — נַחְלְ הַיַּרְדֵּן — 80 + 200 + 400 = 680

合計 = 2,645

2,645 は、四つのヘブライ語名を Mispar Gadol

で計算した数学的結果である。これは黙想のために用いるものであり、聖書が明示的に教える数秘術ではない。

XIV. 総合：キルケゴール — マルセル — ラーナー

キルケゴール — 神の前で自己自身となる

自己は神の前で自己自身になる。ピションは存在を受け取ること、ヒデケルは決断をもって歩むこと、ユーフラテスは限界を受け入れることを示す。

ガブリエル・マルセル — 神秘と現前

生命は問題へ還元できない。ギホンは関係、出会い、現前、disponibilité を示す。他者は物ではなく人格である。

カール・ラーナー — 神の神秘へ開かれる

人間は超越へ開かれた有限な精神である。恵みは神の自己伝達である。人間の渇きは究極的に神を指し示す。

三者はいずれもキリストへ向かう。

XV. 結論 — 源から生命へ

PISON：私は存在を恵みとして受け取れるか。

GIHON：私は関係の中に生きられるか。

HIDDEKEL：私はどこへ歩んでいるのか。

EUPHRATES：私は限界を受け入れ、自分の生命を委ねられるか。

四つの川は一つの源で結ばれる。

一つの川。

四つの流れ。

一つの存在の神秘。

人間は自分自身の源ではない。受け取る者、巡礼者、関係する者、限界を持つ者であり、生命の流れとなるよう招かれている。

LIVING WATER は単なる名前ではない。

それは道である。

源へ帰る。

存在を受け取る。

関係の中に生きる。

方向をもって歩む。

限界を受け入れる。

自分を委ねる。

生命のための川となる。

「渴いている人は、わたしのところへ来て飲みなさい。」 — ヨハネ7:37

私たちは来る。

立ち止まる。

聴く。

飲む。

受け取る。

流れる。

そして最後に源へ帰る。

私たちは源から来る。

人生の中を流れる。

源へ帰る。

LIVING WATER

AIR HIDUP • מַיִם חַיִּים • MAYIM CHAYYIM

By Living Water Maru 810

脚注

1. Søren Kierkegaard, *The Sickness unto Death*, 1849.
2. Gabriel Marcel, *The Mystery of Being*, Vols. I – II, 1951; *Being and Having*, 1935.
3. Karl Rahner, *Foundations of Christian Faith*, 1978.
- 4 – 16. 主要な参考文献は上記三著者の著作であり、自己、神秘、関係、超越、恵み、決断、委ねの主題を支える。

参考文献

Kierkegaard, Søren. *The Sickness unto Death*. 1849.

Kierkegaard, Søren. *Concluding Unscientific Postscript to Philosophical Fragments*. 1846.

Marcel, Gabriel. *Being and Having*. 1935.

Marcel, Gabriel. *The Mystery of Being*. Vols. I – II. 1951.

Rahner, Karl. *Foundations of Christian Faith: An Introduction to the Idea of Christianity*. New York: Seabury Press, 1978.

Duffy, Stephen J. “Experience of Grace.” In *The Cambridge Companion to Karl Rahner*.

聖書。創世記1 – 2章、詩編42、ヨハネ7章・11章・14章、黙示録22章。